

---

# 東方日常記-The World Where Love Spreads-

龍ちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方日常記 - The World Where Love Spreads -

### 【Nコード】

N0024Z

### 【作者名】

龍ちゃん

### 【あらすじ】

幻想郷に住まう恋する少女達、その日常を描く物語。 彼女達の面白おかしい日常を覗いてみませんか？

page 1 : 「嫉妬の緑眼」 (前書き)

・ 水橋パルスィ

嫉妬の妖怪。

同じく地底に住む星熊勇儀に好意を寄せているが、自分ではそれを認めようとしない。

今回の主人公。

・ 博麗霊夢

貧乏神社の巫女さん。

その掴みどころのない (適当な) 性格が妖怪に人気。

敵意も好意もすると受け流す彼女は、きっと斬鉄剣でも斬れない。

… ああ、妬ましい。

朝起きてみたらなんだか地底のみんなが忙しなく動き回っていて、  
なんとなく居づらかったから久しぶりに地上に出てきたっていうの  
に。

特に行くところもないし、雪も降ってるし。

だからって、人間の里なんか立ち寄ったのが悪かったのか。

里は、色とりどりの煌びやかな装飾と、浮ついた人間共とで埋め尽  
くされていた。

派手な装飾のせいか、雪の白さが際立って目を細める。

妙な被り物をかぶった子供が、そこら中を走り回っていてうるさい。

… よもや地上までこの騒ぎとは。

「失敗したわね…これなら、多少居づらくても地底にいたほうが良  
かったかも…寒いしうるさいし」

思わず、ぶるっと身震いをする。

こんなに寒いというのに、人間共には活気が満ち溢れている。

「…ちつ、妬ましい…ああダメだわ、どこか人気の無いところで雪を避けましょう」

そう呟いて私は一人、そそくさとこの喧騒から遠ざかっていった。

「…んで、その流れでどうしてここに来るわけ？」

「ここなら屋根もあるし、人気もないじゃない」

「なめてんのアンタ？…まあ人は来ないけど…」

この神社の巫女である霊夢は、不機嫌そうにそう言った。

「はあ、まあいいわ…それにしたって珍しいわね。パルスィ…よね？アンタの顔を見るのなんてあの異変の時以来だわ」

ちよいちよい、と手招きしながら霊夢が言う。

「そうよ、私はパルスィ。地上に出ること自体久しぶりだしね…前に出たのはどのくらい前だったかしら…」

「ああ、いいわ。アンタらの感覚で過去の話がされるとついて行けない」

霊夢はふう、と呆れたように肩を竦める。

「なによ、失礼ね…そこまで昔の話じゃないわ」ちよいちよい、と手招きしながら霊夢が言う。

「そうよ、私はパルスィ。地上に出ること自体久しぶりだしね…前に出たのはどのくらい前だったかしら…」

「ああ、いいわ。アンタらの感覚で過去の話をされるとついて行けない」

霊夢はふう、と呆れたように肩を竦めて、縁側に座る。

私も座れて事なんだろうか。どちらかと言えば室内に入りたいんだが。

とりあえず私も縁側に腰掛ける。

「まったく、失礼ね…そこまで昔の話じゃないわ…一ヶ月くらい前にも出てきたのよ」

「あら、そうなの？その時も一人で？」

なんだか眠そうな目で空を見ながら、霊夢が問う。

「いえ…その時は…」

言いかけて、口をつむぐ。

そうだ、あの時あんな事があったから、今日も一人なんじゃないか。

「…ええと…」

「ああ、言いたくないなら別にいいわ。なんとなく気になったただけだから…お茶、飲むわよね？こっちの部屋に上がってて」

と言うと、霊夢はひらひらと左手を振って立ち上がった。  
言われるままに、客間と思しき部屋に入る。  
暖かい。

「じゃ、私はお茶を淹れてくるから…その辺に適当に座ってなさい」  
縁側にいる霊夢が、なんとなく事務的に言う。

「え、ええ…ありがとう」

と応えると、障子が閉められた。

(…相変わらず、掴みどころがないと言うか…)

今まで、彼女との会話はそう多くなかった。

ここを知っていたのも、友人に連れられて来たから。

その時は確か宴会だった。

人間の主催する宴会なのに、なぜか妖怪が…それも屈指の実力者が多かったな。

そして彼女はやはり、そんな妖怪達にも、いや、誰に対しても変わらず…どこことなく飄々とした態度だったのを覚えている。

他人の事情や心情に入り込みすぎず、適度な位置から傍観し、時には助言する。

基本的に妖怪なんて自分の事しか考えてない。

だから、好んで他人と関わるような奴もあまりいない。

だけどそんな妖怪達も、彼女の達観したような…飄々とした人柄が

心地良くて、彼女の周りに集まるのかも知れない。

…んん、なんだか妬ましい。

「お茶淹れたわよー。あ、これ羊羹…食べるわよね？」

そんな事を考えていると、不意に障子が開いて霊夢が入って来た。

「えっ？あ、ああ…ありがとう。食べるわ」

「そう、良かった。これね、近くの人里にある美味しい和菓子屋さんの羊羹なのよ」

心なしか嬉しそうに、羊羹に爪楊枝を刺す霊夢。

「へえ…なんだか悪いわね、いきなり押し掛けてきたのにそんな良い物を…」

私も、その羊羹に爪楊枝を刺す。

「いいのよ別に、気にしないで。…それにこれは、貰い物だしね」

霊夢はそう言つて、羊羹を口に運んだ。

「んー！」

霊夢の顔がふにやつと綻ぶ。

それは、初めて見る表情だった。

(…驚いた。こんな顔もするのねこの子)



そんな珍しいものを眺めつつ、私も羊羹を少しかじる。

「あ、美味しい」

「でしょう？うふふ」

幸せそうな霊夢。

その笑顔が少し妬ましい。

（幸せそうね…参拝客はいなさそうなのに…）

「あ、ねえパルスィ」

不意に、霊夢が私を呼んだ。

「なに？」

「今日は12月24日じゃない？地底でも、クリスマスって祝うの？」

「……………あつ」

そうか。そういう事だったのか。

地底のみんなが忙しなかったのも、人里の人間共が浮ついていたのも…そうか、クリスマスのせいだったのね。

「ん？どうしたの？」

霊夢が不思議そうな顔で覗き込んでくる。

「あつ、いや…ええ、祝うわよ」

今の今まで、クリスマスの事自体を忘れていたなんてとてもじゃないが言えない。

「ふーん？…なるほどねえ」

霊夢はなんだか怪訝そうな顔をした後、お茶を啜った。

「ええ、まあそうね」

私もつられてお茶を啜る。

「…と言うことはアンタ、あの鬼と喧嘩でもしたのね」

(！?)

思わずお茶を吹き出しそうになる。

この巫女は何を言い出したのか。

「なっ…何を…」

「んー？だって、クリスマスには恋人と愛を営むものよ」

ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら霊夢が言う。

「あああ、アイツは恋人なんかじゃないわよ！ばっ…バカじゃないの！？」

「あ、そうなの？でもいつも一緒よね」

く…なんでそんな事を聞いてくるのか…！  
私の印象とはまるで違う絡み方じゃない！

「…ま、何かあったんなら話してご覧なさいよ。ここは懺悔室じゃないけど、愚痴くらいなら聞いわよ」

さっきまでいやな笑みを浮かべていたと思ったら、急にまたいつもの調子に戻って霊夢が言った。

…やりにくいなあ。この子に対しての感覚と似たような感覚を私は知っている気がする…。

…ああ、そうか。さとりだ。

心の中を見透かされているような、そんな感覚を多分この子にも覚えてるんだ。

「…ひと月前に、こっちに出てきたって言ったでしょ？その時になんだけど…」

そして、どうしてもか自然と話してしまう私がいる。

おかしいな、普段は絶対他人に愚痴なんて吐かないのに…。

「うん」

霊夢は頬杖をついて、聞いているんだか聞いてないんだか分からないような目でこちらを見ている。

「…あの、ほら…勇儀って、なんというか、その…も、モテる…じゃない？」

こういう事を人に言うのがなんとなく恥ずかしくて、思わず言葉がつかえつつかえになってしまう。

「そうね。アイツは男らしい頼りになる女だしね」

霊夢がずず、とお茶を啜る。

「それで…ひと月前にこっちに来たとき…ああ、山の方に行っただけで…そこで、妖怪の女の子達に囲まれてデレデレしてる勇儀を見て…その…」

「嫉妬して啖呵を切ってそのまま逃げてきて、未だに仲直りが出来ない？」

「……………」

その通りだ、当たっている。

あまりに的確なので、沈黙しか返せない。

「……………うーん、別にいいんじゃない？」

そう言っつて、また羊羹を一口かじって幸せそうな顔をする霊夢。

「…え？」

「だってアンタ、嫉妬の妖怪でしょ？嫉妬すんのが仕事みたいなもんじゃない。アイツ…勇儀だつて、そこまで気にしちゃいないわよ」

ふう、と息をつくくと、霊夢はこちらに微笑みを向けた。

「自分が嫉妬の妖怪だって忘れるくらい嫉妬したの？」

霊夢はそう言って、うふふ、と笑う。

「べ…別にそういうわけじゃあ…」

「ん、ならお帰りなさいな。せつかくのクリスマスなんだから、私なんかじゃなくて…もっと一緒にいたい誰かさんがいるでしょ？」

少し困ったように笑い、霊夢が立ち上がる。

「…ごめんなさいね、霊夢」

私も立ち上がる。

帰ろう。帰って、勇儀に謝らなきゃ。

「別に構やしないわよ。私も、話し相手が欲しかったところだったしね…まあ、また何かあったらいつでも来なさいな」

「ん、ありがとう、また来るわ。ごちそうさま」

私は霊夢にお礼を言って、日差しが反射して眩しい雪道の中を帰って行った。

「…あの子、面白い子だったわねえ。嫉妬の妖怪が自分の嫉妬に耐えられないなんて」

「だからって、私があげた羊羹まで出しちゃってまあ…私も嫉妬し

「ちゃっわ」

「うるさいわよ紫…アンタがなんで嫉妬すんのよ」

「……………はあ……………自分の事には疎いというか、無関心というか…」

「あー？なんか言った？」

「いいえー、なんでもないわあ…それより、どうせ今日もボーっとしてるだけなんでしょう？なら、私と出掛けましようよ」

「珍しいわね、アンタがこの時期にちゃんと起きてるのだって珍しいのに…出掛けるってどこに？」

「そうねえ、人里に私が行くと色々面倒だし…他にこの辺りで洋風の習慣を普通にやっていそうな所ね」

「あー…なるほどね。仕方ない、支度をするからちよつと待ってなさい」

「はあい」

page 1:「嫉妬の緑眼」(後書き)

どうも、龍ちゃんです、(´・`・´)

今作は私の二つ目の連載になります。

もう一方、「ダンス・イン・バレットレイン」も連載中なので良かったらry

今作は東方projectの二次創作となります。

ほとんど作者の趣味成分しか入っておりませんが、楽しんでいただければ幸いです。

ではまた、(´・`・´)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0024z/>

---

東方日常記-The World Where Love Spreads-

2011年11月30日12時57分発行